

道徳の授業で何を学ぶのか？

道徳とは何か？

「道徳」あるいは「モラル」という言葉は、皆さんもいろいろなメディアでよく見聞きするようになってきていると思います。では、道徳とは、何でしょうか。一言でいえば、人びとが、善悪をわきまえて正しい行為を行うために守り従うべき規範となるでしょうか。この場合の「規範」とは、行動や判断の基準となるべき原則のことです。

道徳と似た表現に「倫理」という言葉もあります。倫理も道徳と同じように、人として守り行うべき「道」を意味し、善と悪と正と邪の判断で普遍的な規範となる標準を指します。道徳と倫理は区別なく使われる場合もありますが、あえて両者の違いの一例をあげれば、倫理のほうは道徳と比べて、特定の集団や職業での善悪の判断基準をいう場合が多いことでしょう。たとえば、企業道徳とか、医療道徳とはいわずに、企業倫理とか医療倫理とかいうのがその実例です。

「守り従うべき」ものというのと、まず法律や規則が思い浮かびます。しかし、道徳と法律とは同じではありません。もっとも大きな違いは、法律は外からの強制力として働き、守らないと罰せられますが、道徳には、そのような強制力はありません。道徳は私たち一人ひとりの「心」の問題であり、私たちの内面的（精神的）な規範として働くという特徴があります。

ただし、強制力のある法律の方が、強制力のない道徳よりも重要かという、けっしてそうではありません。もちろん、世の中の秩序を守るためには、法律による強制力が必要です。しかし、法律だけで豊かな人生を築くことができないことは、誰もが実感しているとおりで。たと

えば、法律に訴えて自分の正義を通せたとしても、心が憎しみや怒りで満ちていれば、ほんとうの安らぎや幸福感は得られないからです。

では、道徳と心の安らぎや幸福感とは、どのような関係にあるのでしょうか。ある意味で本書は、その問いに答えるための一つの試みでもあります。「心」の時代といわれている現代こそ、心のあり方がいかに大切かを、今一度見つめ直したいのです。

高校生でも道徳を学ぶ意義は大きい

皆さんの中には、高校生になってまで、なぜ「道徳」を学ぶのかと思う人もいるでしょう。一般に、道徳といえば躰しつけやマナーを連想する人が多いと思われませんが、そうしたものは、家庭の中で行うものであり、学校で学ぶとしても、せいぜい小学校や中学校ぐらいまでである、という意見をよく耳にします。皆さんの中にも「高校生にもなって、今さら道徳の時間か」という意見を持っている人がいるかもしれません。

なるほど、道徳をただ単に躰とか基本的マナーとかいった狭い範囲だけで捉えると、そういう考え方にもうなずける部分があります。しかし、その一方で、大人になってもマナーをまったく守らない人がいて周囲に



迷惑をかけたり、社会的責任のある企業の不祥事などがマスコミをにぎわしたりと、はたして道德教育が本当に行われているのかと疑いたくなる出来事が後を絶ちません。「もっと道德教育に力をいれるべきだ」という意見にも説得力があります。

いずれにせよ、本書では、道德というものを、単なる躰やマナーという礼儀作法のレベルにとどめず、もっと広い視野で捉え、道德を学ぶ場所や時期にも制限を設けないという立場をとっています。

では、その場合の道德とは、何を意味するのでしょうか。端的に言えば、「自分と他者との関係性」であると言い換えてもよいのではないのでしょうか。つまり、道德を学ぶとは、自分がどのような心づかいで、どのような行動をすれば、他者とのより良い関係性を築けるかを学ぶことだといえるでしょう。

そう考えると、自分と他者との関係を考えながら、どのように生きるかについて学ぶことは、特に時期が定められているわけではありません。小学生には小学生の関係性があり、中学生には中学生の、また高校生には高校生の関係性があります。そうした関係性は、環境や年齢が変わるたびに、新しく組みかえられ、それに対応する新しい心構えや態度が要求されるわけですから、ここで終わりというものではないはずです。

ですから道德の学びは、小学校や中学校で終わるものではなく、さらに高校で終わるものでもなく、それぞれの段階に応じた道德的課題に取り組みながら、生涯続けてゆく性質のものだといえそうです。江戸時代幕末の儒学者、佐藤一斎（1772～1859）は、『言志四録』という書物で、「少くして学ばば、^{すなわち}則ち^な壯にして為すことあり。壯にして学ばば、則ち^く老いて衰えず。老いて学ばば、則ち死して朽ちず」という名言を残しています。これは、皆さんのような若い時に学ばば、壮年になって有意義な仕事ができるようになる、壮年になって学ばば、老年になっても頭の働きや気力が衰えることはない、老年になってから学ばば、さらに見識が高くなり、周囲からも尊敬されて、その名は死後も残るといこと

ですが、まさに道徳の学びについても当てはまりそうです。

21世紀のグローバル時代に求められる人間力

これからのグローバル時代は、本書でいう広い意味での道徳が、小学校から大学までの全ての教育課程でますます重要となるでしょう。たとえば、すでにアメリカの高等教育機関では、21世紀の知識基盤社会への対応として、道徳・倫理教育が注目されつつあります。現に道徳・倫理の研究センターなどの組織や教育プログラムは、100を超えるといわれています。

さらに、グローバル時代に国際社会が要求する人材能力として、新しい汎用的な能力（generic skills）の必要性が叫ばれるようになりました。日本の場合も同じで、この新しい能力は、「人間力」とか「社会人基礎力」とか呼ばれています。「社会人基礎力」の具体例としては、「前に踏み出す力」「チームで働く力」「考え抜く力」が挙げられていますが、この中で特に「チームで働く力」は、本書でいう道徳、すなわち自分と他者とのより良い関係性の構築を抜きにしては発揮できない能力です。

今まで「グローバル」という言葉を当たり前のように使ってきました。



ここで改めて「グローバル」とはどのような意味かを押さえておきましょう。一般には、特に経済活動の分野で、これまでの国家や地域などといったタテ割りの境界を超え、地球を一つの単位のようにして変動してゆく過程だといわれているようです。しかし現実には、現在の欧州連合(EU)をみれば分かるように、グローバル化によってけっして国家がなくなるわけではありません。むしろグローバル化が進めば進むほど、国際間の競争が激しくなります。そして、その競争に勝ち残るには、他国と自国との差別化をはかる必要に迫られ、今以上に自国の伝統やユニークさを発揮することが重要となります。

このことは何を意味しているのでしょうか。一つは、それぞれの国家の独自性とアイデンティティーを維持しながらも、地球的な規模での協力、協調、相互依存を旨とする新時代に入ったということです。私たちは自分あるいは自国の利益だけでなく、他者あるいは他国の利益をも考えて、互いが共存し共生しうる道を模索しなければなりません。国際競争が激しくなった分だけ、相互理解と相互協力が必要になるということです。

これはプラスの面ですが、その一方で、経済の動きを見ればわかるように、マイナスの面もあります。グローバル化によって資本の支配力がますます強くなると、以前のように一国の力をもってしてもコントロールがきかないほど、その支配力が暴走する危険性が高まります。先ほど国際間の競争が激化するといいましたが、自己の利益だけを追求する利己主義的な考え方や行動がグローバル化されると、他者を犠牲にして自己の欲望だけを追求する動きもますます拡大されることとなります。その結果として、環境や固有文化の破壊というマイナスの結果をもたらすことにもなりかねません。現在、「持続可能な社会」の構築と経済活動を担う企業の社会的責任の必要性が、声高に叫ばれるのはそのためです。

皆さんの身近な例でグローバル化の現象を考えてみましょう。前にもお話したように、労働市場が国際化すると、今まで国内だけだった競争

が国外まで広がり、教育、テクノロジー、情報などの分野も巻き込んで、各国間の激しい競争が繰り広げられることになります。

たとえば、皆さんが将来挑戦することになる就職試験を例にとってみましょう。以前なら日本人の間だけの競争でした。しかし、これだけ多くの日本企業が海外へ進出するようになると、外国人学生をリクルートする日本企業が日増しに増えるのも当然です。現在、日本に留学している外国人学生も、就職試験では皆さんのライバル、入社すれば職場の同僚となるかもしれません。これは日本の企業の場合ですが、皆さんが外国企業へ就職する場合も同じことが起こります。そこでは皆さんの能力が今まで以上にグローバルな基準で評価されることになります。

そのような新しい環境の中で要求されるのは、前に述べた基礎的学力や社会人基礎力はもちろんですが、たえず変化し続ける世界に対応する能力、他国にはない日本の良き伝統や文化を継承する日本人としての独創性、そして国際的に通用する確固とした道徳観や倫理観ではないでしょうか。

このような視点で道徳を考えてみませんか？

ここでもう一度、道徳のトピックに戻りたいと思います。先ほど、道徳は自己と他者との関係性だといいましたが、その他者とは具体的に誰を指すのでしょうか。ここでいう他者とは、ある特定の個人だけを指すわけではありません。他者には、友人や家族はもちろんですが、学校や地域などのあらゆる種類の共同体、国家、世界、そして自然や宇宙までも含まれます。これは時間軸を横にとった場合ですが、これを縦にとると、これまでの日本を築いてくれた過去の人びと、そしてこれからの日本を築くであろう未来の人びとも含まれるでしょう。

ここですべての領域の道徳的関係性をご紹介することはできませんが、その中からつぎの3つの視点について一緒に考えてみましょう。

(1) 自然との関係性

私たち人類は地球に生命が誕生して以来、現在までその生命維持活動を営々と続けてきました。私たちはそのような地上の生命現象、あるいは宇宙の現象の一つです。生態学的研究によりますと、地上のすべての生き物の間には相互依存の関係があるといわれています。

地球上の生物種の数、全世界の既知の総種数が約175万種で、このうち哺乳類は約6000種もいるそうですが、この中で自然の恩恵にもっとも浴しているのが私たち人間です。たとえば、食物一つ例にとっても、人間ほど多くの動物や植物をたくさん食べている生き物はありません。世界中が注目している環境問題の深刻化の原因は、人間が人間中心的な発想に従い、自然の相互依存システムを自らの手で破壊していることにあるようです。

私たち日本人は昔からこの関係性に気づいていました。食事の前に「いただきます」というのは、食物となって私たちの命を支えてくれている動植物、そしてそれら万物を育成している大自然の恩恵に思いを致し、それらに対する感謝の気持ちを表したいと思っているからです。



(2) 過去および未来との関係性

私たちの相互依存の関係は、現在だけでなく、過去や未来ともつながっています。私たちは過去から歴史や伝統を受け継いでいるとともに、未来の世代にそれらを、できればよりよい形で受け渡す責任があります。

このような関係性を理解することは、物事を決める時の意思決定のシステム、民主主義にとっても必要でしょう。というのも私たちは、意志決定をする際、えてしてその時間の関係性を忘れ、現在の社会を構成する人びとだけの合意ですべてを決定してしまう傾向があるからです。それは範囲の狭い民主主義なのかもしれません。

イギリスの作家・批評家のG.K. チェスタトンは「伝統とは時間的に広がった民主主義にすぎないことは明らかである」(It is obvious that tradition is only democracy extended through time.)と述べています。チェスタトンは、別の箇所で、「伝統」は亡くなった人びとや私たちの祖先の民主主義であるともいっています。今生きている人だけの合意で物事を決めるシステムを「横」の民主主義と呼ぶとしたら、チェスタトンが「伝統」と呼ぶものは「縦」の民主主義といえるかもしれません。それは、先人や祖先たちの意志、あるいは彼らが大切に守ってきた伝統を尊重し、その恩恵に感謝し、その恩に報いることを目指すシステムです。

この「縦」の民主主義を未来へと展開すれば、次世代を受け継ぐ人びとの意思も大切にすることになります。今、社会保障と税の問題がよく取り上げられていますが、いくら民意だといっても、自分たちの世代だけが良ければいいというような利己的な考えに立ち、そのつけを将来に回すというのでは、真の民主主義とはいえないのではないのでしょうか。

(3) 社会との関係性

さきほど、自然との関係性で、人間は動物よりも自然の恩恵をたくさん受けているとお話ししましたが、私たち人間と動物が大きく異なる点

がもう一つあります。それは、私たちが「社会」の中で生きているということ。そして、その社会の本質を一言でいえば、人間は精神的に相互依存の関係にあるということではないでしょうか。だとすれば、自分の利益だけを考えていたのでは、他者とのよりよい関係性は築けません。互いに愛情と、敬意と、感謝をもって接することでしか、社会全体の調和は実現しないのです。日本には昔から、これらすべての関係性に対して感謝を表す「おかげさま」という表現があります。これも 21 世紀で立派に通用する道徳的な発想です。

今までは「道徳」や「モラル」という言葉を聞くと、何かしら堅苦しさを感じる人がいたかもしれません。しかし、真の道徳とは、人を束縛するものでも、威圧するものでもありません。それどころか、道徳は、これからのグローバル化時代を生きていくうえでも、なくてはならない私たちの行動の原動力であるといえるでしょう。

個人の生活においては、私たちに感謝と満足感を与え、私たちの人生をより美しく、より良くしてくれるのが道徳です。あの偉大な物理学者のアルバート・アインシュタインも手紙の中でイギリスの作家チャールズ・ディケンズの言葉を引用し、「われわれの行動における道徳だけが、人生に美と威厳を与えることができる」と述べています（“Only morality in our actions can give beauty and dignity to life.” Albert Einstein’s letter [11/20/50]）。また道徳は個人だけでなく、国家や文明を支える礎にもなりえます。ノーベル生理学・医学賞を受賞したアレキシス・カレルは、「道徳的な美しさこそが、科学や美術や宗教的儀式などより、はるかに文明的基礎となるものである」という言葉を残しています（“Much more than science, art, and religious rites, moral beauty is the basis of civilization.” Alexis Carrel, *Man the Unknown*）。まさに道徳とは、堅苦しいものでも、個性や自由を抑圧するものでもなく、私たちの文明を高め、私たちの人生を美しくするものだといえるでしょう。

（中山 理）